

旧満州のころ

谷口 清

私の青春時代は、旧満州（中国東北部）で日本人と云うだけの優越感で、背伸びした毎日を過ごしていたように思います。

20歳で満州国官吏に任官した私は、牡丹江省寧安県開拓料林務股（係）勤務を命ぜられました。右も左もわからない駆け出しでしたが、林産物の払い下げの仕事を担当しました。この道でのベテラン業者を相手に、月の3分の1は現場出張でした。

若干仕事に馴れた或る日、同僚の中国人雇員に〇〇日老虎嶺の木炭検収に同行するように話をすると、彼の顔が一瞬暗くなったように見えました。検収の当日、列車内で彼は、老虎嶺（ろうこれい）は匪賊の帰順者の集落だと私語するのです。私は平常を装いましたが、内心一抹の不安が心に残りました。駅に着くと4、5人が出迎えに来ていました。その中には顔に傷跡を残している者も混じっていました。初対面のためか、それとも私の警戒心が彼等を緊張させたのか、雰囲気は白々しいのです。私はこの状況を打破するため、彼等を信用し明るく警戒心を捨て、行動することを心に云いきかせて挨拶をしました。

案内された宿舎にはすでに宴会の準備が整っています。如何に対処すべきか迷いましたが、直ちに検収作業を行う旨を告げて検収を実施しました。ところが何が不満なのか、彼等は落ち着きません。代表者に検収票の作成を依頼し、検収印を手交すると、暗かった顔が一変して明るくなりました。多分いままでの検収よりきびしく、炭俵を開いたりしたので、何か文句をつけられると思っていたのでしょう。

その夜楽しく接待をうけました。中でも自家製の白酒（ばいちゅう。柳と渋紙で作った瓶で熟成）の美味は忘れることができません。帰りの列車の中で同僚は「谷口さんお酒たくさん呑んだね。みんなとても喜んでいたよ」とささやいてくれました。

* * * * *

寧安街から約30キロの山奥に「花蓮溝（かれんこう）」という山間がありました。ここで坑木の伐採が始まったので、現場調査に行った時のことです。同僚の陳君が、先日ここから10キロ程の奥で、薬草採取に入山した朝鮮人20人が、匪賊に襲撃され、その遺体の一部が放置されている、との情報をもって来ました。私は県の警備課にこの実態を報告するため、伐採現場の警備隊長と相談し、10名の警備隊員の協力を得て、現地調査を実施したのです。

朝から気温が高く真夏の太陽が容赦なく照りつける中を、細い川沿いの道を進みました。沢幅は次第に狭まり、左は灌木が密生し、5メートル先が見えず、右は木立を経て川が流れる地形が続きました。警備隊員の雑談もとぎれ、水の音が一段と静けさをかきたてていました。突然、視界が開け、川原が出現しました。隊長が「ここです」と言う。死後も髪の毛は成長するのでしょうか。長く伸びた頭髮の遺体が、川原に点々と散乱し、見るも無残な光景にしまし呆然となりました。死体は腐爛し、悪臭でとても近づくことができず、少しく離れた地点で合掌して引き上げました。これだけの事件が県公署に勤務している私の耳に入らないほど、当時は情報が不足し、治安も悪かったのです。

このような治安状態の中で、私は「盲蛇に怖じず」で無茶をしたものです。日の短い秋の

ことでした。出張先で帰り支度を始めると、夜道は危険だから泊まれと言います。私は仕事の都合上、明日の朝一番列車で帰庁したかったのです。そのためには今夜中に駅のある部落まで行く必要がありました。押問答のすえ、5名の警備員に護衛されて、10キロ先の部落に向かって出発しました。日はとっぷりと暮れ、鼻をつままれてもわからない闇夜で、星は満天に輝き、風もなく大地は静まり、足音だけが大きく聴こえるのでした。物淋しさに強行したことを反省していると、突然、静けさを破り「誰何（すいか）」*2されたのです。私はこの時程ドキッとしたことを知りません。警備員との応答が繰り返されやっと門が開けられました。帰庁してこの顛末を報告すると、平素無口な係長に「若しものことがあったらどうする。仕事より命が大切だ。」と、お説教をいただいたのです。

* * * * *

このころ娯楽はなにもありませんでした。映画も牡丹江市に行かねばならず、スポーツも、キャッチボール位のものでした。独身の私達は、退庁後することがなく、勢い酒に走ったのです。寧安街の近郊は日本軍の兵舎もあり、日本人学校もあった位日本人がいました。日本人が経営する飲食店も5軒ありました。

或る日、スッポン鍋でご機嫌になり、帰ろうと玄関近くの部屋の前にさしかかると、部屋から出て来た伍長と目と目が合いました。どっちが先に声をかけたのかわかりませんが「保さんでないか」「清さんでないか」と、気がつく二人は抱き合っていました。高等小学校卒業以来、9年ぶりの出会いだったのです。日本の2倍半の面積をもつ満州の片田舎で、それも一瞬の差ですれ違いになるところだったのです。私はこのとき程世の中は広いようで狭いこと、神仏の引き合わせ、偶然という言葉に魅了させられたことはありません。

* * * * *

満州には雉が沢山いました。山道を歩いていると、草叢から数羽の雉が飛び立ち、驚かされたことは珍しくありません。仙頭と言う丘陵地に白樺炭鉱が開坑しました。坑木のことで訪ねた夕食の膳に、久しく食べていない「トロ」の刺身がついていました。海から遠く離れたこの片田舎で、どうして手に入ったか不思議に思い尋ねると、雉の抱肉だったのです。雉肉は過食を戒めるためか「血を荒らすとか、古傷を呼び出す」と云いますが、この時のお美味しさは格別でした。夕食後、雉の捕獲に誘われました。捕獲の方法は、雉の習性を利用したものです。寒くなると雉は山から里に下りて来て、沢の草叢で寝ます。その寝込みを襲い網をかぶせる方法です。大きな網の四方を持ち上げ、前の人音を立てないように、後ろの人は「ガサガサ」と意識的に音を立てます。驚いて飛び立つと網の中という、簡単なことで沢山生捕りができたのです。

* * * * *

(たにぐち きよし 大正8年生まれ)

***1 匪賊** 徒党を組んで出沒し、殺人、略奪を行う盜賊のこと。

***2 誰何** 警備の兵や人が「誰か」と呼びかけて名を問いたすこと。